



## リトルアン2.0 QCPRとAEDトレーナー

構成品:

- リトルアン2.0 QCPR 6体\*
- AEDトレーナー3/パック×2\*
- AEDトレーナー搬送バッグ
- \*QCPRアプリ対応



詳しくは  
こちらから



よりスマートに操作できる講習会用ソリューション。効率性、サステナビリティ、使いやすさを追求した最新型です。リトルアン2.0 QCPRとAEDトレーナー、QCPRアプリを組み合わせると、インストラクターは講習準備が軽減するほか、人命救助トレーニングのインパクトも高められます。

### 応急手当を広める会(福岡市)

令和3年設立。福岡市消防局の応急手当普及員の資格取得者を中心とする市民がボランティア運営している団体。応急手当の技術と知識を広めることを目的に、技術練習を中心とした応急手当の出前講習会を、年間50回以上開催している。

## 市民によるCPRを広めるために

「応急手当を広める会」のメンバーが活動する福岡県は、九州をけん引する経済都市だ。人口増加率も九州一で、特に福岡市は政令指定都市の中でも高い人口増加率となっている。

福岡県の心原性心停止のうち、心肺蘇生を実施した割合は69.5%と全国第1位を誇る(令和3年)。心原性心停止患者の1カ月生存率18.8%(全国11.1%)、1カ月後の社会復帰率も



13.4%(全国6.9%)と高い。その数字をさらに上げたいと活動しているのが「応急手当を広める会」のメンバーたちだ。

年間50回以上の講習会の講師として会員を派遣している同会では、定期的に研修会を開き、会員のスキル向上を心がけている。今回はそんなメンバーに集まっていただき、リトルアン2.0とQCPRアプリを使った講習を「受講する」「講師をする」という2つの視点で検証してもらった。

講習は最新型のリトルアン2.0の特徴と使い方、アプリとの連動の方法などをレールダルメディカルジャパンの平川善

大が解説するところから始まった。

「応急手当を広める会」では、福岡市の救急病院協会からリトルアンの従来モデルの貸し出しを受け、それを使っての講習を行っている。これまで担当するグループ内で差がないようアプリは連動させていなかったという。まずは平川より新型リトルアンの説明を受けたメンバーは、アプリとの連動に高い興味を示していた。

これまでの講習の中で「速度はメトロノームなどを使えば指導しやすいが、押す深さやもどしがきちんとできているかをなかなか参加者に伝えづらい」という課題を感じていたからだ。

今回の講習ではメンバー自らが参加者となり、1人1体のリトルアンとスマホをアプリで同期させ、実際にQCPR(※1)を体験した。会場となった70㎡の会議室に12体のリトルアンを持ち込み、12名が参加。各自がアプリを接続するなか、なかなか接続できないスマホもあり、スマホ操作に慣れていない参加者がいる場合はアプリ接続の説明をしっかりとる必要性を感じたようだった。

アプリがつながると、メンバーたちはさっそくCPRのトレーニングに入った。

講師: 平川善大

(レールダルメディカルジャパン株式会社)

教育サクセスマネージャー 看護師/保健師/看護学教育博士/看護大学での教員経験を活かし、医療/教育機関でのシミュレーション教育/学習の導入やデジタル教材の開発/普及などに携わる。

(※1) QCPR

Quality CPR 質の高いCPR

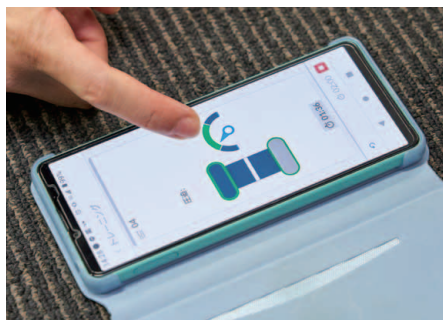


## 最新型リトルアン2.0 QCPR を使って

講習は最新型のリトルアン2.0の特徴と使い方、アプリとの連動の方法などをレールダルメディカルジャパンの平川善

## アプリの活用で“見える化”されたトレーニング

今回の講習会でメンバーが一番関心を抱いていたのが、アプリを連動させたトレーニングだった。それだけにトレーニングを始めると、どのメンバーも熱中したようにリトルアンに



向き合っていた。

いつもは「言葉」と「動作」で参加者にCPRの基本を伝えていたメンバーだが、「どのくらい押し方がいいのか」「深さは

足りているのか」「もどしはきちんとできているのか」と、具体的に伝えることは難しいのが現実だったという。

「スマホ画面に、圧迫の深さ、もどし、リズムなどが視覚化され確認できるので、練習教材としては良かった」と話すのは、同会の坂井正司代表だ。「私たちが言葉で伝えるよりも一発で参加者が理解できると思う」とその機能を絶賛する。一方、普及員だからこそ気づく点もあったようだ。

「手技に関する注意点を見ると、総合点との整合性に疑問



を感じるころがあった。深さが不足(78%)と出て、速さは平均点の108だったのにもかかわらず、総合点は97点という表示になった」と、同会副代

坂井正司 代表



表の神崎誠志さんは気づきを話す。QCPRアプリの点数はそれぞれの要素を総合的に計算するアルゴリズムで算出される。その説明も必要と思われた。

神崎誠志 副代表

## 今後のトレーニングに期待が広がる

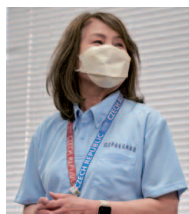
「使いやすさ、気軽さ、目で見て分かる視認性、そして都度その場で修正ができるということは、とても良かった。情報を受講者と共有し、さらに受講者に状況をフィードバックできるのが役立ちます。これは素晴らしいと思った」と、話すのはこれまで受講者に力の情報を言葉でうまく伝えられなかったという竹下裕一さんだ。

「さらに言うなら、音や音声ガイダンスという聴覚と、使い方や訓練方法を動画で見せる視覚とをスマホに機能付加するなど可能性も広がりますよね」とも話す。

ほかにもメンバーからは「圧迫の位置の正確さまで判断できると良いと思う」「残り時間ももっと見やすくなるといい」「合格ライン表示があると良いかも」といった指導員としての視点での声があがっていた。

日ごろから定期的に訓練をしているメンバーたちにも、「指導員としてのレベルアップにつながる道具だった」と高評価だったリトルアン2.0とQCPRアプリ。今後、参加メンバーが行う講習が一般市民への広がり期待できそうだ。

## U s e r ユーザーレポート R e p o r t



### 岩佐明美さん

(普及員歴21年)

これまでのリトルアンよりも運びやすいこと、スマホで深さや速度を測れるのが良いですね。講習する立場としては、片付けしやすいのも助かります。消防本部にぜひ教えていただきたいと感じました。これまでの人形より少し硬く感じたので2分が長く感じました。



### 木村香織さん

(普及員歴15年)

QCPRでのトレーニングは、受講者様だけでなく指導者の練習にも有効だと思います。特に指導者のレベルアップに使えると感じました。今後は、視覚障がい者の方や聴覚障がい者の方向へのQCPRが受講できるような機材ができると、より普及が進むと思います。



### 上野順子さん

(普及員歴26年)

アプリでフィードバックがあるので、具体的に結果を確認しながら学習できて効果的です。ただ、現在は機材の借用ができる場所が少ないのももっと増えるといいと思います。「チョコザップ」のような気軽に練習できる場所が増えるといいかもしれません。